

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2016-08-15

APM news 156

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)

第34回美術館大学

「秋山孝の神秘2『点と線』～形を失う形の活用の思考～」1

7月9日(土)pm3:00～pm4:30 / 受講者:65名 / 講師:秋山孝 / 進行:堀池真美



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233



秋山孝の表現の秘密を解き明かすシリーズ「秋山孝の神秘」展の第2回のテーマは「点と線」である。さらに今回は「形を失う形の活用の思考」というサブタイトルがついた。この言葉を読んだだけでは容易に理解できない秋山独自の思考を第34回美術館大学では秋山本人が解説した。

まず、今回のテーマは、日常私たちが何気なく使用している「点」と「線」というものの本質とは何か?と改めて意識するところからはじまる。古代ギリシャの哲学者プラトンは、自身が創設したアカデミーの入り口に「幾何学を知らざる者、ここに入るべからず」と刻んだほど、幾何学を重要視していた。同じく古代ギリシャの数学者ユークリッドはこれに従い、数学史上重要な著作の1つ「ユークリッドの原論」を執筆した。数学上では「点」とは、空間における正確な位置を定義するために使われる概念であり、大きさ、方向などの位置以外のあらゆる特徴を持たない。すなわち「部分」をもたないものであると定義した。また、「線」とは幅のない長さである。これらは、3次元の世界には存在しないものなのである。秋山の創作もこの基本原論を意識することから始まっている。

イタリヤ・ルネサンス期になると「透視図法」が発見された。それまで平面であった絵画に空間を表現するその技法は大発見であり一気に広まった。今でもデッサンの基礎として重要なものになっている。しかし、それは前出の「ユークリッドの原論」によれば矛盾だらけのものとなり、概念的な混乱をきたす。ここに平面上における空間の概念に支障をきたしている。秋山は着目している。実際、当時の透視図法で描かれた作品を見ると、私たちは不自然さを感じる。自分の目を通して見ている世界とは明らかに何かが違うのである。私たち人間は2つの目で物事を認識している。左右の目の間には距離があり、差異が生じている。その差異を脳で調整して見ているのだ。透視図法で描く絵画は整っており、歪みや狂いが無い。すなわち面白くない画面となる。かの有名なダヴィンチやミケランジェロも透視図法を用いているが、独自に調整をして、歪みを加え、魅力的な作品を造り上げている。

その後、「空気遠近法」が生み出された。光が大気に吸収され拡散したり反射する作用によって、遠くなるほど色が淡く青みがかったり、輪郭がぼやけたりする。その視覚的効果を活用して距離感を表現する技法である。何も描かれていない所に何を見るか。何が見えるか。そこには計り知れない奥行きが表現され、透視図法を越える大発見となった。

それから秋山はジョルジュ・スーラのデッサンをみたときの衝撃を語った。スーラはそれまでのデッサンの描き方や解剖学を全て否定した。消え入りそうな淡い炭の濃淡で描かれた彼のデッサンはなんとも美しく、秋山はそれを見た瞬間自分がいまままで学んできたデッサンでは敵わないと脱帽したという。そして、スーラは点描という描き方も発明した。ここで今回のサブタイトルである「形を失う形の活用の思考」に繋がる。スーラの作品を拡大して見てみると無数の色の点(ここでは「ユークリッド原論」の概念とは違う一般的認識としての「点」)の集まりで描かれていることがわかる。ここに「形を失う形の活用」があると秋山は考えた。そして、それを「線解」「点解」と位置づけ、「字形」「字解」に類似する「形を失う」「形の活用」として研究を進め、研究対象は文字へと移る。【▶次号へつづく】(たかだみつみ・APM事務局長/APM公式ホームページより抜粋)